区内を南北に縦断する厚別川（あしりべつ）は、昔から、この地で暮らす人たちの生活と、密接にかかわってきました。
今月は、この厚別川とわたしたちとのかかわりを紹介しながら、清田区を代表する河川「厚別川」の役割を考えてみましょう。

「暴れ川」からまちづくりの中心へ

本市の南端にある空沼岳周辺を源流として、区内を南北に縦断する厚別川。

たびたび繰り返される洪水から、かつては「暴れ川」といわれていたこの川も、明治から昭和にかけ、米作りなどにおいてこの地の発展に欠かせない役割を担ってきました。

しかし、河川の改修が進み周辺に宅地が広がると、緑あふれるまちづくりの中心的存在として、今までとは違う役割を求められるようになってきました。平成十一年に区が策定した「清田区まちづくりビジョン２０２０」。このビジョンでは、厚別川を人と自然とを結び付ける「緑と川の空間」づくりの中心として、位置付けています。

区では、ビジョンを具体化するため、平成十一年度から二年間「あしりべつ川の会」を設置しました。この会では地域の住民などが、厚別川の今後の在り方などを話し合いました。

平成十二年度から、国道36号に架かる清田橋と下流の厚別橋の間で行われている親水工事（川原の造成や階段、散策路の設置）は、この会の意見などを受け、厚別川を管理する北海道札幌土木現業所が行っているものです。

子どもたちの「自然の教室」として

区のまちづくりにとって重要な役割を担う厚別川は、子どもたちにとっても、貴重な自然体験の場です。

上流部に位置する有明小学校では、毎年夏になると、全校児童が校舎裏を流れる厚別川に入り、川遊びをしながら自然とふれあいます。授業でも川の動植物を観察するなど、厚別川を通して多くのことを学んでいます。

また、厚別川の自然環境を遊びながら学んでもらおうと、清田橋下流で区が昨年八月に開催したイベント「あしりべつ川体験塾」には、小学生など子どもたちが八十人以上参加しました。国道36号を境にした植生の違いを確かめながら、実際に川に入って魚を捕るなど、身近に流れる川で初めての体験をした子どもたち。区では、今年も同様の取り組みを行う予定です。

▲昨年のあしりべつ川体験塾の様子

地域のふれあいの場として ～北野地区の取り組み

地域の中心を厚別川が縦断する北野地区では、厚別川を地域のふれあいの場として、積極的に活用しています。

区民のページ1ページで紹介した北野地区パークゴルフ同好会もその一つです。

また、毎年、同地区町内会連合会では、ヤマベの稚魚放流（区民のページ6ページで紹介）のほか、二千人もの住民が参加する河川敷の草刈りと清掃、北野ふれあい橋周辺の河川敷を会場とした地区の一大行事「北野ふれあい夏まつり」などを行っています。

同連合会副会長の奈良光芳（ならみつよし）さんは、「地区の中心を流れる厚別川は、住民にとって生活に密接した川。この環境や自然を大切に残したい」と力強く語ります。

清田区のシンボル的存在として

大樹の幹に若葉と厚別川。清田区の頭文字「K」をあしらった区のシンボルマークには、厚別川がモチーフ化されています。

清流厚別川は、緑のまちづくりの中心として、そして子どもたちや地域のふれあいの場として、今も、わたしたちにとってなくてはならない、清田区を代表する河川です。

タイトルの写真は、平成13年度清田区写真コンテスト応募作品「西日の頃（ころ）」（徳田登志子（とくだとしこ）さん撮影）です。